堀口大學の訳詩と創作詩の相関についての一考察：訳者の異国体験の追体験の場としての『月下の一群』

大村　梓

Horiguchi Daigaku's Translation and His Own Poems: Reading *Poets Under the Moon* Through Perspective of the Translator

OMURA Azusa

Abstract

Horiguchi Daigaku is best known as a translator, particularly for editing and translating *Gekka no ichigun* (*Poets Under the Moon,* 1925), an anthology of Western poems, into Japanese. However, he began his career as a poet and only gradually became interested in translation. His experience of living abroad in the most his twenties was an asset to building a career as a translator. This paper discusses what *Gekka no ichigun* reveals about Horiguchi's perspective of Western culture and compares *Gekka no ichigun* with *Sango shu* (*Coral Anthology,* 1913), a collection of Western poems translated and edited by Nagai Kafu, in order to grasp the connection between Horiguchi's career as a poet and a translator. For example, particular world Horiguchi used in his translation can also be found in his own poems. Prevailing scholarship emphasizes the influence of Western poetry translation on Modern Japanese poetry; however, I argue that the influences sometimes went in the opposite direction. That is to say, Horiguchi's writing style, which was cultivated under Yosano Akiko, Tekkan and Nagai Kafu, affected his translation and consequently the young authors who learned the new style of writing from his translations.

キーワード：翻訳、『月下の一群』、堀口大學、『珊瑚集』、永井荷風
key words: translation, *Poets Under the Moon*, Horiguchi Daigaku, *Coral Anthology*, Nagai Kafu

はじめに

明治以降の名訳詩集としては、外山正一他編訳『新体詩抄』(1882年)、新声社編訳『於母影』(1889年)、上田敏編訳『海潮音』(1905年)、永井荷風編訳『珊瑚集』(1913年)、そして堀口大學編訳『月下の一群』(1925年) がすでによく知られている。それぞれの訳詩集をめぐる主に原詩との比較による考察は広く行われてきているが、[1] 各時代の西欧文学受容の流れを解明するために用いられていることが多く、訳詩集の一連の流れと創作詩の関係を一人の翻訳者に焦点を当てて検証する試みはほとんどされてこなかったといえるだろう。本論文は翻訳家堀口をその創作詩、恩師永井 (『珊瑚集』) との関係、そして『三田文学』での活躍という彼の翻訳活動をめぐる周辺を整理したのちに、その訳文テクストを再度考察するという方法を用いることによって、堀口の訳詩と創作詩の関係性を明らかにしようと試みる。また、訳詩集の特徴を明らかにするために『珊瑚集』と『月下の一群』の比較考察を行った上で、堀口の訳詩と創作詩との相関について分析する。上田(『海潮音』)と堀口(『月下の一群』)の関係性と永井(『珊瑚集』)と堀口 (『月下の一群』) の関係性の大きな違いは、堀口と上田との距離には時代的にも心理的にも遠

山梨県立大学　国際政策学部　国際コミュニケーション学科
Department of International Studies and Communications, Faculty of Glocal Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

いものがあったのに対して、永井は堀口の恩師であった。永井は早くから堀口の才能を認め、彼の創作詩集や翻訳詩集に序文を書き送っている。本論文では、堀口と永井の関係性を背景に、2つの訳詩集を原詩の選択と語彙・テーマに焦点を当てて比較検証していく。そしてこれまで日本近代詩の文体に影響を与えた存在として主に捉えられて来た『月下の一群』を堀口の文学活動の一端として捉えた場合に、新詩社から諸国遊学、そして帰国までの堀口の創作活動の影響を強く受けているのではないかと考えた。実際に『月下の一群』に収められた詩の多くに用いられている「わななく」という言葉は堀口の創作詩にも頻繁に登場している。これは堀口の創作詩の傾向が訳詩に影響を与えた一つの例だと考えることができるだろう。以上のことに焦点を当て、堀口の訳詩と創作詩の相関について明らかにしていきたいと考える。

1．訳者の異国体験の追体験の場としての『月下の一群』

堀口大學は1909年に第一高等学校の入試に失敗し、育ての親である祖母が亡くなるなど不遇の時期を過ごすが、『スバル』に掲載された吉井勇の「夏のおもひで」を目にして新しい短歌のあり方に感銘を受け新詩社に参加している。そして翌年、18歳の時に新詩社で同じく創作に励んでいた佐藤春夫とともに9月に慶應義塾大学に入学している。現在、堀口は翻訳者としてよく知られているが、そもそも創作を10代から始めており、彼の求める方向は吉井勇の短歌に見られたような、若者の感性のみずみずしさを簡潔な言葉で描くことであった。堀口は新詩社に参加して1年ほどで「新詩社同人」ではなく、与謝野晶子や吉井勇と並んで目次に自らの名で創作短歌「夏のなごり」が載るなど、[2] 彼の才能を若い時から認めていたのは、第一には新詩社の与謝野晶子と与謝野鉄幹であるが、永井荷風も堀口の才能を若いときから認めていた一人である。

新詩社の同人として『スバル』で創作活動を始めていた堀口にとって、1910年から永井が教鞭をとることになった慶應義塾大学の文学部予科に入学することは願ってもないことであった。当時の慶應義塾大学の魅力を「鴎外、敏の両博士を顧問に、小山内薫、馬場孤蝶、野口米次郎、戸川秋骨と、当時の文学青年にとって魅力百パーセントの名を教授陣に連ね、月々新鮮味溢るるばかりの「三田文学」を発行してゐる三田の文科へは、何とかして入りたかつた」[3] と堀口は後に述懐している。そして予科への入学が許された堀口はこの後、創作詩と訳詩・訳文を意欲的に『三田文学』へ投稿し始める。

堀口は20代のほとんどを異国の地で暮らし読書と創作・翻訳にふけっていた。そして帰国後に訳詩を集めて出版した『月下の一群』（1925年）は文壇から高い評価を得て、堀口も翻訳家としてより広く認められるようになった。しかし永井は堀口の文学活動にその前から注目をしていた。彼は堀口の第一訳詩集『昨日の花』（1918年、籾山書店から出版）の序に次のような賛辞を寄せている。

> ［前略］げに君は久しくかの国にありてその思ふ所その見る所感ずる所のものをかの国々の新しき詩に託して漂白の悲しみを慰めたまひき。その選びとりて翻訳せられしものおのづからその折々の君が心にいと近くいと親しきものなりしや言ふをまたず。然りとすれば此翻訳一巻の詩は君を知るわれ等に取りては豈只に尋常一様の翻訳詩とのみ看過すべきものならんや。昨日の花はまことにこれ君が深き思出の花ならでやは。[4]

ここで永井はこの訳詩集を読むことにより堀口の異国体験（「かの国にありてその思ふ所その見る所感ずる所のもの」）を知ることができると示唆している。[5]『昨日の花』は一連の翻訳詩集の流れから見るのであれば西欧の新しい詩の在り方を日本語読者に伝える役割を持っているが、同時に一東洋の青年として海外諸国を遊学した堀口の西欧詩の読書体験を日本語読者が追体験する場を提供するものであることを永井はここで明らかにしている。堀口の翻訳詩の背景にある豊富な異国の

滞在経験を念頭に置くことにより、日本語読者たちは翻訳詩から堀口の異国文化体験をも追体験することができるだろう。

永井は堀口の創作詩にも関心を寄せていたようだ。1919年、堀口の第一創作詩集『月光とピエロ』に永井は序を書き送り、次のように堀口の才能を称賛している。

> 君は久しき南欧諸国の旅より帰り来たまひてかの国々の新しき調を昨日の花につたへ今また遽に南の方ぶらじるの都に去らんとして近き日の吟咏を故国の友に残し留めんとす。既によく君を知る友はこの新集月光とピエロによりて更に深く更に親しく君が琴線の調を聴き得ていささか離愁を慰むべく未だよく君を知らざるものはこれによつて始めて君が詩壇に於ける地歩全く抜くべからざるものあるを暁らん。[6]［後略］

永井は堀口をよく知っているものと知らないものが『月光とピエロ』をどのように受け止めるかを述べているが、いずれの場合も序の冒頭で述べているように、堀口の異国体験は堀口の文学活動を理解するために不可欠の要因として読者に語りかけられているのがわかる。それによって読者には堀口の文学活動と異国滞在が離れがたい要因として認識されることになる。もちろん実際に堀口が海外諸国に滞在した経験は彼の翻訳の質を上げるために大きく作用したことは誰もが認めることだろうが、それが堀口の翻訳詩の印象にも強く作用しているのだ。[7]

また1924年レニエ作、堀口訳『燃え上る青春』にも永井は序文をしたためている。

> ［前略］堀口君亦よく之を知り其外遊中レニエーが新作の市に出るを見るや必一本を購つて郵寄せらる。欧州大乱の時吾国学芸の士皆舶載の新書を獲るに苦しみたり。然るに余は独堀口君の海外に在るの故を以て愛好の新書を手にすること毫も太平の日に異らざるを得たり。レニエーの著作の余に於けるや其感化恰良師に見ゆるが如し。而して堀口君の余に於けるや其親善当に兄弟に比すべし。今レニエーが好著の翻訳堀口君の手によつて成れるを見る。余の喜何ぞこれに如くものあらんや。堀口君初め翻訳の筆を執るに臨んで書を原作者に寄せ其教を乞ふこと少からざりしと云ふ。此一事を以て見るも堀口君の訳著は近事世に流行する所の杜撰なる翻訳物の類に非ざるや明なり。[8]［後略］

日本にいる永井が異国に滞在する堀口に西欧の書物の入手を頼っていたのがわかる文章である。ここでは堀口が欧州と日本の文化の仲介役としての役割も担っていたことが示されている。

その他にも永井が編集に携わった『三田文学』の消息欄に書かれた記述にて堀口の翻訳の周辺の動きを我々は知ることができる。

> ◯メキシコ市の堀口大學氏から来信があつた。同市の事情を知る便りにもなるので其の一節を左に掲げる。
>
> さて、メキシコの世界が此頃ではもうすつかり秋らしくなつて参りました。
>
> ［中略］
>
> 当市から横浜へ帰る商人に托して、詩集と小説集とを一冊づつ御とどけさせる事にいたしました。何れ、この手紙と前後してとどく事と思ひます。どうぞ私のまづしいけれども親しみのあるカドウを御受け下さい。
>
> 詩集の方は、当地在留の仏国詩人オオギユスト・ジユネン氏の作で当メキシコの歴史物語を唱つた詩集でございます。氏は欧人のメキシコ通のオオソリテイを以つて任じて居られます。当市にては、氏はダイナマイト会社の社長をして社用の傍ら詩と歴史に才筆を用ひてゐられます。（下略）[9]

■またブリユツセルの堀口大學氏から永井先生にあてたる書翰の一節は

［中略］

こんな風でまだ土地なれぬ私にはものさびし

い夕ぐれが多いのでございます。
近頃当ベルギイ文壇でさわがれて居るのはCamille Lemonnierの死でございます。毎日どの新聞にか死んだこの国のよき作家を悼む記事の一つ二つはきつと見あたります。皆一様に「以後ベルギイ文壇がさびれ行く事だらう」と嘆いて居ります。[10]［後略］

■ベルジユウムの堀口大學氏から永井先生に左の書翰が届いた
［中略］
ベルハアレン氏が目下講演に来て居られます。未来派の開山の伊太利人（名を忘れました）も目下当市にて開講中でございます。十一月の三田文学がもう来る頃とまつて居ります。メエテルリンク氏の新作脚本については未だ何等の批評もききません。多分まだ舞台に上らない為めでございませう。[11]［後略］

■最近着の堀口大學氏の手翰如次。
［中略］
　戦争以来一時死んだ様うに静かで寂しかつた仏国の文壇も今年の春あたりからまた大分活気づいて来た様子です。それだけ仏国に余裕が出て来たのかと思ふと仏蘭西贔屓の私には微笑が浮ぶのです。それで此頃では文学の書物もどしどしと出版されますし、文学雑誌も随分出る様うになりました。色々な出版物もかなりよく売れて行く相です。いい事になつて来ましたね。[12]［後略］

このように堀口の動向の記録は一青年としての海外諸国滞在記としてだけではなく、大正・昭和初期文壇と西欧諸国の文壇とのつながりを示すものでもあった。そして永井の序文が示すように、堀口の文学活動と異国滞在は同時に読者に語られる。つまり堀口の翻訳家としての活動はその周辺の状況（創作活動、西欧の書物を日本へと送るなど文化の仲介者としての役割、異国滞在）と共に分析されなければいけないことがわかるのだ。そして「堀口大學」という存在が文壇の中で印象づけられていく過程がここからわかる。

2．訳詩集の特徴：詩と詩人の選択から

堀口大學をめぐる周辺について主に恩師永井荷風の側から明らかにしてきたが、次に永井編訳『珊瑚集』と堀口編訳『月下の一群』を比較することによって『月下の一群』の特徴を明らかにしたい。『月下の一群』は1925年に第一書房から刊行されたが、1928年には新しく何編かの詩を加えて『新編　月下の一群』が同じく第一書房から刊行されている。

『珊瑚集』はシャルル・ボードレール（Charles Baudelaire）の7篇の訳詩（「死のよろこび」、「憂悶」、「暗黒」、「仇敵」、「秋の歌」、「腐肉」、「月の悲しみ」）を所収している。これらの詩には「死」、「憂悶」、「臨終」、「墓」、「断頭台」、「腐肉」といった生よりも死を連想させる言葉が多く用いられ、いずれもボードレールの詩によく見られた暗鬱とした雰囲気が漂っている。一方で『月下の一群』は2篇（「秋の歌」、「幽霊」）の訳詩を所収し、『新編　月下の一群』ではさらに2篇（「夕のしらべ」、「前世」）が加えられている。「秋の歌」については用いられた語彙に着目し次の項で詳述するが、『月下の一群』に所収された2篇の詩は永井が訳したボードレールの詩のように、どちらも「闇」、「断頭台」、「棺」、「小暗き夜」や「青ざめし朝」といったように人生の暗い側面を描き出している。そういった特徴は『新篇　月下の一群』に新しく所収された詩にも共通している。

また永井、堀口の両者ともポール・ヴェルレーヌ（Paul Verlaine）の作品を訳している。『珊瑚集』では7篇（「ぴあの」、「ましろの月」、「道行」、「暖き火のほとり」、「夜の小鳥」、「返らぬむかし」、「無題」）、『月下の一群』では9篇（「秋の歌」、「われの心に涙ふる」、「暗く果なき死のねむり」、「風」、「若い哀れな牧人」、「青空」、「あかつきの星に」、「哀歌」、「倫敦ブリッヂ」）が収められている。『珊瑚集』に掲載された詩はいずれも、「おぼろに染まる薄薔薇色の夕」[13]（「ぴあの」）、「底なき鏡の／池水に／影いと暗き水柳」[14]（「ましろの月」）、「寒いさむしい古庭」[15]（「道行」）、「くらきかげ、静けき夜」[16]

(「暖き火のほとり」)、「霧たち籠むる河水に樹木の影は／烟の如くに消ゆ」[17]（「夜の小鳥」)、「風戦ぎて黄ばみし林」[18]（「返らぬむかし」)、「空は屋根のかなたに／かくも静に、かくも青し」[19]（「無題」）といったように、自然の描写を用いて美しい情景を詩の内部に漂わせている。この傾向は堀口編訳『月下の一群』にも引き継がれており、自然を描いたヴェルレーヌの詩を堀口は多く訳している。[20] そして堀口は『新編　月下の一群』ではさらに4篇のヴェルレーヌの詩の訳詩（「草の上」、「マンドリン」、「かなしき対話」、「白き月かげ」）を加えている。「白き月かげ」は永井が訳した「ましろの月」と同じヴェルレーヌの「La lune blanche」という詩を訳したものである。

ヘンリ・ド・レニエ（Henri de Régnier）の詩については、永井は10篇（「仏蘭西の小都会」、「葡萄」、「われはあゆみき」、「夕ぐれ」、「秋」、「正午」、「告白」、「庭」、「瓶」、「年の行く夜」）を掲載し、堀口は11篇（「思ひ出」、「唄（野山の上に…)」、「唄（暗い林の…)」、「唄（お前は思ひ出すか…)」、「唄（明日はやがて…)」、「唄（それは只の…)」、「唄（かしこ声高き)」、「唄（若しも私が…)」、「唄（歌ひながら流れる…)」、「唄（私は何も持たない…)」、「黄色い月」）を掲載している。「うららかに」[21]（「仏蘭西の小都会」)、「しづしづと」[22]（「正午」)、「いかにとや」[23]（「告白」)、「あじきなき」[24]（「庭」）といった日本的な表現が永井訳では続く。しかし堀口訳でも「なよやか」[25]や「しとやか」[26]といった表現は見られ、いくらか文語寄り、口語寄りといった違いはあるがそこまで差異が明確であるとはいえないだろう。

このように『月下の一群』の特徴について共通する詩人について『珊瑚集』と比較した限りではそこまで際立つ特徴が明らかにならないが、堀口の読書体験や異国体験を追体験するという意味で『月下の一群』を再読すると、堀口が実際に交流していた人物も含まれているのに気がつく。『月下の一群』に訳詩が掲載されたポール・モランと堀口はパリで面会しており、また交流のあったマリー・ローランサンの詩（「鎮静剤」、「馬」、「虎」、「小鳥」）が紹介されている。

堀口とローランサンは親交が深かったとされ、[27]『新編　月下の一群』には「日本の鶯」という詩が掲載されている。

日本の鶯

彼は御飯を食べる
彼は歌を歌ふ
彼は鳥です
彼は勝手な気まぐれから
わざとさびしい歌を歌ふ。[28]

このような詩からは異国の芸術家との実際の交流が想起され、読者たちは憧れを抱くだろう。こういった堀口の訳詩がなしえる作用はまさに単なる読書を超えた訳者の異国滞在の追体験の機会を読者に提供していると考える。

3．訳詩集の特徴：共通する詩人の作品の比較考察から

このように『月下の一群』を堀口大學の読書体験、異国滞在の追体験の場としてみると、同時期に作成された訳詩と創作詩の関係があらわれてくるのではないかと考えた。『珊瑚集』、『月下の一群』にともに掲載されたボードレールの詩‘Chant d’automne’の訳詩の比較によって『月下の一群』の特徴を考察し、創作詩との関連性も探ってみたい。

‘Chant d’automne’はボードレールの*Les Fleurs du mal*（『悪の華』）の中の1篇である。まずボードレールの仏語原詩である。2つのパートに分かれているが、本論文では1つ目のパートのみを紹介する。

‘Chant d’automne’

I
Bientôt nous plongerons dans les froides ténèbres;
Adieu, vive clarté de nos étés trop courts!
J’entends déjà tomber avec des chocs

funèbres
Le bois retentissant sur le pavé des cours.

Tout l'hiver va rentrer dans mon être: colère,
Haine, frissons, horreur, labeur dur et forcé,
Et, comme le soleil dans son enfer polaire,
Mon cœur ne sera plus qu'un bloc rouge et glacé.

J'écoute en frémissant chaque bûche qui tombe;
L'échafaud qu'on bâtit n'a pas d'écho plus sourd.
Mon esprit est pareil à la tour qui succombe
Sous les coups du bélier infatigable et lourd.

Il me semble, bercé par ce choc monotone,
Qu'on cloue en grande hâte un cercueil quelque part.
Pour qui?- C'était hier l'été; voici l'automne!
Ce bruit mystérieux sonne comme un départ.[29)]
（下線は筆者による。以下同。）

この詩では秋から冬へと向かう情景が描かれているが、永井と堀口によって訳されたボードレールの他の詩同様に自らの鬱屈とした感情がその情景に投影されている。

次に永井の訳である。

秋の歌

一
吾等忽ちに寒さの闇に陥らん、
夢の間なりき、強き光の夏よ、さらば。
われ既に聞いて驚く、中庭の敷石に、
落つる木片のかなしき響。

冬の凡ては――憤怒と憎悪、戦慄（をののき）と恐怖や、
又強ひられし苦役はわが身の中に帰り来る。
北極の地獄の日にもたとへなん、
わが心は凍りて赤き鉄の破片よ。

をののぎてわれ聞く木片の落つる響は、
断頭台を人築く音なき音にも増りたり。
わが心は重くして疲れざる
戦士の槌の一撃に崩れ倒るる観楼かな。

かかる懶き音に揺られ、何処にか、
いとも忙しく柩の釘を打つ如き……そは、
昨日と逝きし夏の為め。秋来ぬと云ふ
この怪しき声は宛らに、死せる者送出す鐘と聞かずや。[30)]

そして堀口の訳である。

秋の歌　ボオドレエル

一
われ等やがて肌寒き闇の中に沈み入らん、
おおさらば、左様ならよ、短きに過ぐるわれ等が夏の生気ある輝きよ！
われすでに聞くなり、庭の舗石の上に、
さびしき響して落つる枯枝を。

恨み、憎み、戦慄（わななき）、怖れ、止むなくもつらき労働の冬は
今し再びわが身のうちに帰へり来らんとし、
極地に於ける太陽に似て、わが心は
凍りたる赤色の一塊に過ぎざらんとす。

われ戦慄（ふるひわなな）きつつ一つ一つ落木の音に耳を傾く、
断頭台建つるもの昔も斯は陰惨たることなけん、
今わが精神は断間なく打ちおろす重き鉄槌の下にくづれ行く塔にも似たり。

この単調なるもの音にうち揺られつつ
何所にか人ありて急ぎ棺に釘する如し
誰が為の棺ぞ？きのふ夏なりき、さるを今し秋
この神秘なるもの音は何やらん出発の如くにひびく。[31)]

ここで注目したいのは、原詩の‘frissons’（ふるえ）と‘en frémissant’（ふるえながら）という言葉を、用いた言葉は異なるが永井と堀口は同じ言葉で訳出していることである。永井はこれらを「をののき」という言葉で訳している。一方、堀口は「わななき」という言葉を用いている。原詩ではどちらの場面も作者の「ふるえ」を表すように用いられており、2つの訳文テクストでもその表現に特段の変化は見られない。しかし同じ表現を用いることによって、原詩よりも反復のリズムが強くなっていることは事実である。

ここで堀口が好んで用いていた「わななく」という表現に注目したい。『月下の一群』の中で「わななく」という表現は頻繁に用いられている。シャルル・ヴイルドラックの「訪問」という詩では、「たちまち彼をわななかせた」[32] とされ、「秋の歌」と同じく人が実際に震えているか、もしくは感情の動きを表現するために使われている。フランシス・カルコの「嘆き」では、「木の葉はゆれる――ああ、わななきやがて消えて行く感動――」[33] と、感情表現のために用いられている。必ずしも人が震えているのではないが、トリスタン・クリングソオル「鴉」の「私のまつげの間にわななくのは涙ではないか？」[34] という表現も、人の感情を表すために用いられている。さらにジユウル・ロオメエンの「恋は巴里の色」でも「おお　とらへがたき夕ぐれよ、／されども窓の硝子／汝が為にわななく空の泉となり」[35] となっており、「空の泉」が震動しているとされている。人ではないものが「わななく」動作をする対象とされている例は他にもあり、たとえばギイ・シヤルル・クロス「流れ」では、「水の中に石一つ、／わなななきふるへる水の中に。」、[36] と水の中の石のある情景を描くために「わななく」という言葉が用いられている。情景に「わななく」という言葉を用いる例は他にも見られ、アンドレ・スピイル「頬白鳥」は、「空は青、空は白、／温い空気はわなななき、わた雲はをどる、／雲はお前の歌の上を流れる／静かに、おとなしく。」[37] としている。フランシス・ジヤムの「緑の水の岸」では、「生温かい水の中に白い魚が動く／夕ぐれの日かげに／ものの影が水の上にわなないてゐる／黒い木のそばで。」[38] とされる。ジヤムの「正午の村」でも、「町の方では黒い屋根が／青空に向つて青い煙を吐いてゐる／わななくやうに見える地平線の上で／懶惰な樹木が身をゆすぶつてゐる。」[39] とある。同じくジヤムの「聞け」では「歌は空気がその中で／わなななきながら浴する澄んだ水のやうだ。」[40] となっている。これらのように自然の情景を描いている場合でも、そこに作者の心情が重ね合わされていることが多い。そして前述したように堀口は『新編　月下の一群』に新たにボードレールの詩を2篇追加しているが、その中の「夕のしらべ」という詩の中では、3回も「わななく」という表現を用いている。[41]

そして創作詩にも「わななく」という表現は頻出している。『三田文学』を見ていくと、「空しき心」（1912年）という創作詩で堀口は「わななく」という表現を使用している。

空しき心

寺の円屋頂のうちこそは
げにわが空なしき心なれ。
そこには朝も昼もなく
ただにさびしき薄明と夜とのみ。
もろもろの光はこのうちに死に
もろもろの声はこのうちに亡ろぶ。

人は常に黒き衣をまとひ
首垂れてこのうちに入り。
罪と罰との宿命に
怖れわなななきつつ
青ざめて影の如消えゆく。[42]
（後略）

ここでは「わななく」という言葉で人の感情が描かれている。また「われは愛づ」（1916年）という創作詩では「われは愛づ／若くして老ひたる心を、／冬の怖れにわなななきつつ／咲き出でたる最後の花を、／涙とともにある微笑を、／明日の日にたえなん恋を。」[43] と自然の情景を用いて作者

の感情を表現するのに用いられている。そして「早世」（1917年）という創作詩では「行く春の日の黄昏に／散り行く花を思へかし、／わななきつつももの影に／消ゆる光を嘆けかし、／若き二十の暮方に／果つる生命を泣けよかし！」[44] となっており、自らの感情を表現するのに「わななく」という言葉を頻繁に用いている様子が見られる。

これらの訳詩と創作詩における一連の同じ表現の頻出回数の多さと用いる自然描写や内面描写のつながりの傾向は単に原詩と訳詩の関係性を超えて、堀口の文体の傾向が訳詩に影響を与えている証左として認識することができるだろう。

おわりに

このように原詩と訳文テクストの比較の前に、堀口大學をめぐる周辺を整理してから分析を行った。永井荷風の序文や『三田文学』での消息欄が示すように、堀口の異国滞在の語りが訳文テクストを受容する上での必須の要因として読者に繰り返し提示されていたことがわかった。堀口は20代のほとんどを異国の地で過ごしていたために、大正・昭和期の文壇での翻訳家・詩人堀口大學像の形成が本人の意図を超えた形でより行われやすかったのだと考える。原詩と訳文テクストのみの関係性を一度離れて、訳文テクストを堀口の新たな創作物とみなしてその表現の共通性を創作詩との間に探ってみると、同じ語彙の頻出が見られた。それによってこれまでの一連の訳詩集の流れでの日本近代詩の文体の形成に影響を与えた翻訳詩集のあり方とはまた別に、翻訳される言語の文学思潮、翻訳者、及び翻訳者をめぐる周辺が大きく影響を与えていることがわかった。そういった視点から『月下の一群』を再考すると、新しい文体のお手本としての本訳詩集の重要性とともに翻訳家・詩人堀口大學の西欧詩の読書、異文化体験の追体験の場として当時の読者たちに受容されていたことがわかる。そしてそれこそがこの翻訳詩集を他の訳詩集とは異なる存在としている理由に違いないのだ。

謝辞

本研究はJSPS科研費19K13148の助成を受けたものです。

＊引用に際して旧漢字は新漢字に改め、踊り字も改めた。またルビは原詩と訳詩の比較に必要なものを除いて外した。

注

1）吉田精一解説、森亮他注釈『日本近代文学大系　第52巻　明治大正訳詩集』角川書店、1971年は明治以降の訳詩集を原詩と比較し詳細な解説を行なっている。また佐藤伸宏『日本近代象徴詩の研究』翰林書房、2005年は『海潮音』に収められた詩の分析を行なっている。

2）堀口大學「夏のなごり」『スバル』、第2巻第10号、1910年、163―165頁

3）堀口大學「恩師永井荷風先生」『堀口大學全集　第7巻』小澤書店、1983年、96頁。初出は堀口大學「恩師永井荷風先生」永井荷風『昭和文学全集　第5巻』月報、角川書店、1953年。

4）永井荷風「詩集昨日の花のはじめに」堀口大學『堀口大學全集　第2巻』小澤書店、1981年、535頁。初出は永井荷風「詩集昨日の花のはじめに」堀口大學『昨日の花』籾山書店、1918年。

5）拙稿にてすでにそれぞれの訳詩が堀口の青春時代と深く結びついていること、そして日本を遠く離れていた堀口は先人の翻訳家たちの新しい表現を作り出そうという責務から比較的自由であったことは指摘した（大村梓「詞華集としての西欧詩の訳詩集：堀口大學編訳『月下の一群』を中心に」『山梨国際研究』、第14号、2019年）。

6）永井荷風「月光とピエロ序」堀口大學『堀口大學全集　第1巻』小澤書店、1982年、7頁。初出は、堀口大學『月光とピエロ』籾山書店、1919年。

7）アンドレ・ルフェーブルは翻訳を‘rewriting’（「書き直し」）と呼び、翻訳者が訳文テクストだけではなく、作家、作品、時代、ジャンル、そしてときには文学全体のイメージを作り上げる可能性を示唆している。（Lefevere, André. *Translation, Rewriting, and the Manipulation of Literary Fame*, London and New York: Routledge, 2016, p.4）

8）永井荷風「燃え上る青春の序」『堀口大學全集　補巻1』小澤書店、1984年、5頁。初出は永井荷風「燃え上る青春の序」レニエ、ド・アンリ．（堀口大學訳）『燃え上る青春』新潮社、1924年。

9）「消息」『三田文学』第1期、第3巻第12号、1912年12月、

192－93頁
10)「消息」『三田文学』第1期、第4巻第11号、1913年11月、182－183頁
11)「消息」『三田文学』第1期、第5巻第2号、1914年2月、183－184頁
12)「消息」『三田文学』第1期、第7巻第12号、1916年12月、138頁
13) 永井荘吉「珊瑚集」『荷風全集　第9巻』岩波書店、1993年、27頁。初出は永井荷風編訳『珊瑚集』籾山書店、1913年。
14) 同書、29頁
15) 同書、32頁
16) 同書、34頁
17) 同書、35頁
18) 同書、36頁
19) 同書、39頁
20) 前掲「詞華集としての西欧詩の訳詩集：堀口大學編訳『月下の一群』を中心に」、17頁
21) 前掲「珊瑚集」『荷風全集　第9巻』、50頁
22) 同書、62頁
23) 同書、65頁
24) 同書、67頁
25) 堀口大學「月下の一群」『堀口大學全集　第2巻』小澤書店、1981年、113頁。初出は、堀口大學『月下の一群』第一書房、1925年
26) 同書、113頁
27) 堀口はローランサンとの交流について書き記している（堀口大學「マリー・ローランサン」『堀口大學全集　第6巻』小澤書店、1982年、606―614頁、初出は堀口大學『水かがみ』昭和出版、1977年）。
28) 堀口大學「新編　月下の一群」『堀口大學全集　第2巻』小澤書店、1981年、547頁。初出は堀口大學『新編　月下の一群』第一書房、1928年。
29) Baudelaire, Charles. *Œuvres complètes tome 1*, Paris: Gallimard, 1975, pp.56-57（*Les Fleur du mal* は1861年を底本とする。）
30) 前掲「珊瑚集」『荷風全集　第9巻』、16－17頁
31) 前掲「月下の一群」『堀口大學全集　第2巻』、122頁
32) 同書、36頁
33) 同書、70頁
34) 同書、102頁
35) 同書、41頁
36) 同書、85頁
37) 同書、96頁
38) 同書、196頁
39) 同書、203頁
40) 同書、205頁
41) 同書、549－550頁
42) 堀口大學「空なしき心」（「小さき呼吸」）『三田文学』第1期、第3巻第4号、1912年4月、82－83頁
43) 堀口大學「われは愛づ」（「夕べの思」）『三田文学』第1期、第7巻第2号、1916年2月、93頁
44) 堀口大學「早世」（「紅水晶」）『三田文学』第1期、第8巻第4号、1917年4月、76頁